

学び直しの本質

そもそも、なぜ今、学び直しが叫ばれているのか。そのルーツと今に至る時代の変化を知り、学び直しという行為が本質的に持つ意味、人生における意義を問い直す。

文〓岩崎久美子（放送大学教授）
イラストレーション〓村田善子



「学び直し」登場 なぜ注目されているのか

「学び直し」という言葉を昨今耳にすることが多くなった。この「学び直し」とはどのような意味を持っているのか。

実は、わたしたちは意識するかどうかは別にして、日々何かを学んでいる。それは、家事の

ヒントや旅行の情報など生活を快適に楽しくするための知識もあれば、役所の手続きに対応するための仕組みや制度についての実際的な知識もある。もちろん、今日何を学んだかと聞かれてもすぐには答えられないように、学習は意識されないものもあり、たまたま近所の人から料理のコツを聞くなどの計画性のない偶発的なものを含めれば、その多くは日々の生活に組み込まれた形で行われている。

しかし、「学び直し」は、このような日常的な学びとは異なる。それは、社会的目的を持った組織化された学習を意味する。
組織化された学習とは何か。学校の教室で先生が子どもたちに教えている風景を思い浮かべて欲しい。子どもへの学習機会の提供は、義務教育という形で制度化されており、学校という場において組織的に実施される。このことは、白紙の状態で生まれた子どもに文化

を伝え、将来私たちの社会の構成員になってもらうために行われる社会による働きかけである。一方、すでに社会の構成員になっている大人に対しては、そのような具体的働きかけは一律には行われない。
それでは、なぜ組織的で制度化された「学び直し」という学習機会に注目がなされているのか。

「学び直し」のルーツ まずは生涯教育があった

このことを考える前に、まずは、「学び直し」という言葉のルーツを考えてみたい。実は、そのルーツとも言えるエポックメイキングな出来事がある。1965年のユネスコの会議で提唱された「生涯教育」論の登場である。「生涯教育」論は、特定の年齢層に限定されている閉塞的な学校制度を打破し、生涯にわたる教育や学習の機会を保障するといった革新性を持ち、新しい教育政策を模索していた世界の国々に衝撃を与えた。時期を待たずしてOECDにおいて「リカレント教育」論が提示されたのも同様の理由である。

「生涯教育」論は抽象的なものであったが、OECDの「リカレント教育」論は、教育と労働や余暇などの時期を交互に繰り返す制度を想定し、社会・労働などの総合的な政策を含む具体性を持つものであった。しかし、異なる部分

はあるとしても、「生涯教育」論や「リカレント教育」論の背景には、生涯にわたって学習できる環境整備をすることで世代間格差や社会階層間の格差を減少させるとの共通の理念があり、高度経済成長期を背景にした財政基盤がその議論を可能にしていた。そして、「教育」という言葉が象徴するように、提供する主体は社会にあり、「教育有給休暇制度」などにより、成人への学習機会を制度化すべきとの思潮があった。

その後、「生涯教育」が「生涯学習」という言葉に徐々に置き換わる。そのひとつの理由は、「生涯教育」が、生涯にわたって個人を管理するという受け止め方がされたことがある。学習する判断や自由は個人に帰するもので、学習の主体が学習者個人であるとすれば、自己啓発的な意味合いを持つ「学習」が好ましいと捉えられたのである。しかし、このことによつて、大人になってからの学習は、個人の自発性に基づくもの、そして、個人に属する私的事項と考えられるようになっていった。

話を戻すと、閉塞的な教育制度を打破しようとする動きは、その後高等教育にも及んだ。日本の通学制の大学のほとんどは、18歳から20代前半の学生で占められている。あらゆる年齢層に高等教育を拡充する動きは、日本では既存の大学への成人学生の受け入れではなく、独自の大学創設という形をとった。それが1983年に設置された放送大学であ

る。さらにこのような高等教育機会の拡充は、「臨時教育審議会」の議論を経て政策化され、1991年の「大学設置基準の大綱化」による大学制度の弾力化に伴い、既存の大学や大学の門戸が社会人に開かれることになった。

このように、この半世紀、大人になってからの学ぶ場は整備されてきた。しかし、学習する環境が社会的に整備されたとはいえ、学ぶかどうかは個人の意思によるものである。実は学びを続けることが雇用の確保、収入、生活の満足度、自己効力感などに影響することが研究等で明らかにされてはいるものの、学習することの恩恵は学習することを望む者だけに限られている。学ぶ者は益々学び、学ばない者は益々学びから離れていく。大人になってからの学びが個人の自発性に基づくものとするれば、学習する者としいない者の格差は、年齢を重ねることに広がっていく。学ぶことは個人に委ねられている。しかし、学びから離れていく者が不利益な状況に陥る場合には、それを包摂しうる社会的な学習の場が必要という議論が昨今はなされるようになった。

「学び直し」の国際的動向 「リスクリング」のインパクト

それでは、個人が行うものであったはずの大人の学びというものに対し、なぜ社会的に「学び直し」が喧伝されるようになったのか。



大人になってからの学びに政策的関心が寄せられるようになったのは、ヨーロッパにおける若年層の失業問題からであった。グローバル化する経済にあつては、経済競争力を高めるために、学校で獲得した能力と労働市場が求める能力とのミスマッチを埋めるため継続的学習が必須とされ、その後の学習によって労働市場で評価される能力(エンプロイアビリティ)を高めることが失業者を減らす、あるいは社会的排除をなくす鍵と考えられたのである。EUやOECDといった国際機関が人的資本論に基づき、政府の経済成長誘導や社会的結合を維持する政策手段として成人期の学習をクローズアップするようになると、成人対象の継続学習・教育が多くの先進国の政策的関心を引くようになった。

日本では、このような国際的動向を受けて「学び直し」という言葉が使われるようになった。しかし、この言葉は概括的なイメージがあつたがゆえに、実際には実践的職業能力向上に目標があつたのかもしれないが、当初は大人の学びを広くとらえる言葉として「生涯教育」論や「リカレント教育」論と同義と考える人が多かつたと思う。しかし、「学び直し」が、「リスキリング」という言葉に置き換わると、その内容はICT(情報通信技術)やAIの技術などの新しいスキルを身につけた人材の育成、そして産業構造の変化に伴う労働移動に焦点化されるようになっていった。いわば「リスキリ

ング」は、労働市場の求めるスキル獲得という道具的・目的的学习である。

「学び直し」の人的定義 喜びと希望のために

目まぐるしい社会の変化に対応し、陳腐化する知識・技能を「リスキリング」するための学習・教育環境の整備は、人々の雇用の確保・維持のためには必要不可欠なことであろう。しかし、人はパンのみで生きるのではない。また、上昇するための競争にずっと参加することは疲れる。

人生にはマージン、つまり余白のような時間と空間が必要である。大人になってからの自発的な学びは、自分の人生を考える上で付随する息抜きのようなものである。人は自分の人生をより良くしたいという根源的欲求があり、そのために、自分の人生を振り返り、未完の行為の達成、劣等感の克服、人生の軌道修正など、自分の人生を意味づけたいと考える。人が学びを求めるのはそんなときである。

大人の学びは、人との出会いや対話の形をとることが多い。その理由は、それぞれの人が有するそれまでの生きてきた歴史、その経験こそが、生きることを教えてくれる教科書であり、そのような他者との邂逅こそが大人の学びの真髄だからである。学びを求める人が集う場合は、学ぶという目的の下に、年齢、性別、社

会的背景などがもたらす差異はなく、中立的で平等だ。異なる経験を持つ人々が、学びという同じ土俵で意見を交わすことで、自分を振り返り、異なる意見やもの見方を知り、自分の価値観や考えを広げることができる。人と共に学ぶこと、そこには新しい何かを一緒に獲得する喜びがある。そして何よりも、人とつながって学ぶことは楽しい。

今こそ、「学び直し」の豊かな人的定義が必要かもしれない。なぜなら、「人生を考える機会」としての大人の学びの場は、内外の様々な困難に取り巻かれていた私たちに、新たな道を探し出す契機を与え、そしてその先の希望をもたらすものだからである。

「学び直し」という言葉の中には、人間本来の望みが託されている。社会に大人の学びの場が多数存在し、誰もが学ぶ機会を享受できることは、文化的豊かさを象徴するものでもある。だからこそ、「学び直し」という言葉が大人の学びの様相を広く含むものとして理解され、さまざまな学びの環境が大事に扱われることを願わずにいられないのである。

いわさきくみこ

1962年宮城県生まれ。上智大学文学部卒業、筑波大学大学院教育研究科修士。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科修士。国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官を経て、2016年より現職。内閣府構造改革特別区推進本部評価・調査委員会委員、日本生涯教育学会理事等を務める。著書に『成人の発達と学習』、『生涯学習支援論ハンドブック』等がある。